

【古典文法 形容詞・形容動詞 識別①】

問 次の文中にある傍線部の形容詞・形容動詞の活用の種類と活用形を答えなさい。

- ① 年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。(伊勢物語)
- ② さりとて、し出ださんを待ちて寝ざらんも、わろかりなりなんと思ひて、(宇治拾遺物語)
- ③ 世の中に物語といふもののあなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、(更級日記)
- ④ 初めより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものにおとしめそねみ給ふ。(源氏物語)
- ⑤ 大江山いくのの道の遠ければまだふみもみず天の橋立と詠みかけけり。思はずに、(十訓抄)
- ⑥ 二十日余り一日の日の戌の時に、門出す。そのよし、いささかにものに書きつく。(土佐日記)
- ⑦ 思ひかけずあやしと、中の関白殿おぼし驚きて、いみじう饗応し申させ給うて、(大鏡)
- ⑧ いかに、殿ばら、殊勝のことは御覧じとがめずや。むげなり。」と言へば、(徒然草)
- ⑨ 木の陰に下りゐて、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。(伊勢物語)
- ⑩ 弓矢取りは、年ごろ日ごろいかなる高名候へども、最後のとき不覚しつれば、(平家物語)
- ⑪ 所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、(方丈記)
- ⑫ 村上の聖代応和の頃ほひ、三五夜中新月白く冴え、涼風颯々たりし夜半ばに、(平家物語)
- ⑬ 人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ。(紫式部日記)
- ⑭ これも今は昔、忠明といふ検非違使ありけり。それが若かりける時、(宇治拾遺物語)
- ⑮ 「いかやうにかある。」と問ひきこえさせ給へば、「すべていみじう侍り。(枕草子)

⑬	⑩	⑦	④	①
⑭	⑪	⑧	⑤	②
⑮	⑫	⑨	⑥	③

問 次の文中にある傍線部の形容詞・形容動詞の活用の種類と活用形を答えなさい。

- ① 年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗き^レに來けり。(伊勢物語)
- ② さりとて、し出ださんを待ちて寝ざらんも、わろかり^レなんと思ひて、(宇治拾遺物語)
- ③ 世の中に物語といふもののあるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、(更級日記)
- ④ 初めより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものにおとしめそねみ給ふ。(源氏物語)
- ⑤ 大江山いくのの道の遠ければまだふみもみず天の橋立と詠みかけけり。思はずに、(十訓抄)
- ⑥ 二十日余り一日の日の戌の時に、門出す。そのよし、いささか^レにもの^ニ書きつく。(土佐日記)
- ⑦ 思ひかけずあやしと、中の関白殿おぼし驚きて、いみじう饗応し申させ給うて、(大鏡)
- ⑧ いか^ニに、殿ばら、殊勝のことは御覽じとがめずや。むげ^レなり。」と言へば、(徒然草)
- ⑨ 木の陰に下りゐて、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。(伊勢物語)
- ⑩ 弓矢取りは、年ごろ日ごろいかなる高名候へども、最後のとき不覚しつれば、(平家物語)
- ⑪ 所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、(方丈記)
- ⑫ 村上の聖代応和の頃ほひ、三五夜中新月白く冴え、涼風颯々たりし夜半ばに、(平家物語)
- ⑬ 人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ。(紫式部日記)
- ⑭ これも今は昔、忠明といふ検非違使ありけり。それが若かりける時、(宇治拾遺物語)
- ⑮ 「いかやうにかある。」と問ひきこえさせ給へば、「すべていみじう侍り。(枕草子)

①	ク活用・連体形	②	ク活用・連用形	③	ナリ活用・連体形
④	シク活用・連体形	⑤	ク活用・已然形	⑥	ナリ活用・連用形
⑦	シク活用・終止形	⑧	ナリ活用・終止形	⑨	ク活用・連用形
⑩	ナリ活用・連体形	⑪	ク活用・已然形	⑫	タリ活用・連用形
⑬	シク活用・未然形	⑭	ク活用・連用形	⑮	ナリ活用・連用形